

熊本地震の発生から4カ月余りが過ぎ、熊本県内の大学では学びの一環として復興を支援する取り組みが始まりつつある。8月初旬に同県大津町の森林で崇城大（熊本市西区）が主催した「アートによる被災者の心をケアする取り組み」を取材した。

【川上珠美】

「きょうは大学から来たお兄さん、お姉さんと一緒に絵を描きましょう。みんな絵、描くの好き？」「大好きー」。木漏れ日が差す森の中、子供たちの元気な声が響いた。取り組みには崇城大で芸術を学ぶ学生や大学院生15人が関わり、2、6歳の幼児と保護者約30人が参加。木の枝と枝の間に白い布を張って森の中に大きなキャンパスを作り、色鮮やかな絵の具で思い思いに絵を描いた。

大津町の会社員、小路千穂さん(35)は3歳の長女と参加した。自

大学が熊本復興支援

アート通じ被災者ケア

ボランティアで単位認定も

宅に大きな被害はなかったが、長女は大きな揺れに襲われた本震後に建物内に入ることを怖がるようになり、2週間余り自宅近くで車中泊した。この日、長

る。日本面を専門とする同大大学院の木下裕介さん(33)は「小さな子供たちと接する機会はありませんので新鮮」とシャツと手を絵の具だらけにして子供たちと遊んだ。「地震後は家の近くの公園で遊ぶ子供の姿も減った。家の片付けなどみんなが

し、災害に関する座学や成果発表を行って単位として認定する。同大では他にも、震災後の街並みを記録する「集落の復興カルテ」づくりなどの研究も動き始めている。同大は地震発生直後に近隣の避難者を受け入れ、避難所を開設して学生が自主的に運営にあたった。避難所閉鎖後も学生側から「もっと支援活動に携わりたい」という声が多く、大学の担当者は「学生の熱意をくみ取り、震災後の地域づくりのキーパーソンの育成を目指したい」と話している。

女は絵の具入りのペットボトルを手に終始できげんな様子で、小路さんは「ふとした瞬間にまだ不安そうな表情を見ることがある。

生たちは他者との関係が不足しがちだ。自分が社会の中でどのような役割を果たせるのか考える良い機会になれば」と期待を寄せ

熊本地震と大学



熊本地震によって施設が損壊するなど被害を受けた大学は多く、東海大阿蘇キャンパス（熊本県南阿蘇村）は近くの学生向けアパートが倒壊し学生らが亡くなり、校舎にも多数のひびが入った。崇城大は工学部が学ぶ空港キャンパス（同県菊陽町）の壁などが一部損壊。熊本県立大は一時休校して体育館やロビーなどを避難場所として提供した。

新 教育の森

九州・山口